

## 研究ノート

**コンクリート塊の牽引**  
 —瀬戸内国際芸術祭 2010 の解剖台展示と  
 ハンセン病療養所での死をめぐる生活環境—

阿部 安成<sup>1</sup>、石居 人也<sup>2</sup>、脇林 清<sup>3</sup>

**Appeal of a Concrete Lump:  
 Autopsy Table Exhibit at Setouchi International Art Festival 2010  
 and Life Preceding Death at a Leprosy Sanatorium**

Yasunari ABE<sup>1</sup>, Hitonari ISHII<sup>2</sup>, Kiyoshi WAKIBAYASHI<sup>3</sup>

1. Faculty of Economics, Shiga University

2. Jiyuminken Institute of Machida City

3. Reikokai, Christian Church, Sanatorium Oshimaseishoen

This paper introduces photographs, news articles, and interviews about an autopsy table exhibited at the Oshima venue (Takamatsu City, Kagawa Prefecture) of the Setouchi International Art Festival held in 2010. Its aim is to identify the point at issue in discussing the history of, and life at, a leprosy sanatorium.

The autopsy table in question was at one time used in the National Sanatorium Oshimaseishoen (Oshima Island, Takamatsu City, Kagawa Prefecture). It had been dumped on the island's shore since the 1980s. The relic was towed out for the art festival and displayed as an expression of the sanatorium's past.

Many newspapers provided coverage of the table as the highlight of the Oshima venue. None, however, published the photographs contained in this paper: the table abandoned on the shore, before it was turned into a work of art. The photographs were taken by Kiyoshi Wakibayashi, a resident of Oshimaseishoen and a delegate of the facility's Reikokai Christian church. Wakibayashi had in fact suggested that the table be hauled out and exhibited in the art festival—a fact that all newspapers failed to mention.

Instead, every newspaper echoed that the autopsy table represented the “sad” past of the sanatorium. Excerpts from six such sources are given in this paper.

The displaying of the defunct table became a reminder to Oshimaseishoen residents of their home's old practices concerning death. On the one hand, the table brought back memories of the dreaded, practically compulsory autopsies of the past; on the other, it provided an opportunity to reflect on the partings from former fellow residents who bid farewell to this life.

The authors believe that to sum up life at the leprosy sanatorium as “sad” is to neglect the meaning of life for the residents altogether. What, then, is a better approach? We felt that the autopsy table exhibit called for attention to this issue.

**Keywords:** Hansen's disease, sanatorium, autopsy, historicizing

### はじめに—解剖台の引き揚げから—

2010年7月19日に、高松と7つの島々—小豆島、犬島、豊島、直島、女木島、男木島、大島を会場とした「瀬戸内国際芸術祭2010」（以下、芸術祭、と略記する）が始まると（会期は10月31日まで）、そののち、テレビや雑誌に新聞などいくつものメディアで芸術祭が紹介されていた。開幕まえにたまたまみたテレビ番組では、芸術祭紹介で最初に示された地図には大島もきちんと記してあったものの、本題の案内では大島について一言もふれられはしなかった（毎日テレビ2010年7月17日放送「知っとこ！」の「夏休み極上旅SP①瀬戸内の島で感動&興奮アート体験」のコーナー）。このとき、やはり大島は扱いつらいのか、とおもった。たとえば、新聞報道においても、「ハンセン病の元患者が暮らす「大島青松園」をボランティアガイドの案内で巡り、アートを通して元患者の声を聴く」（「瀬戸内国際芸術祭／七島アート散歩」『朝日』7.11、第2香川面）<sup>1)</sup>と、ごくかんたんに大島を「ハンセン病の元患者が暮らす」島と紹介する記事もあり、また、「瀬戸内国際芸術祭2010／完全ガイド。」を掲載した『カーサブルータス』（2010年9月号、マガジンハウス）でも、「全島がハンセン病回復者の療養施設である大島にギャラリーやカフェを開き、入所者と人々が交流できるプロジェクトを実施」との説明があり（ただし、大島の記述が全会場のなかで最も少ない文字数）、他方で、まったくハンセン病にふれない記事もある（「瀬戸内国際芸術祭 きょう開幕」『産経』7.19、香川面、「島の自然・歴史 美と一体／瀬戸内国際芸術祭」『読売』7.29、文化面）<sup>2)</sup>。現在、大島には、再開された高松市立庵治第二小学校があるとはいえ、そこはほぼ療養所だけの島といってよい。大島を会場とするのであれば、ハンセン病の療養所についてふれないことは不自然なのだ。もっとも、大島の「アート作品」の数はたった1つだから<sup>3)</sup>、とりあげられないのかもしれない。

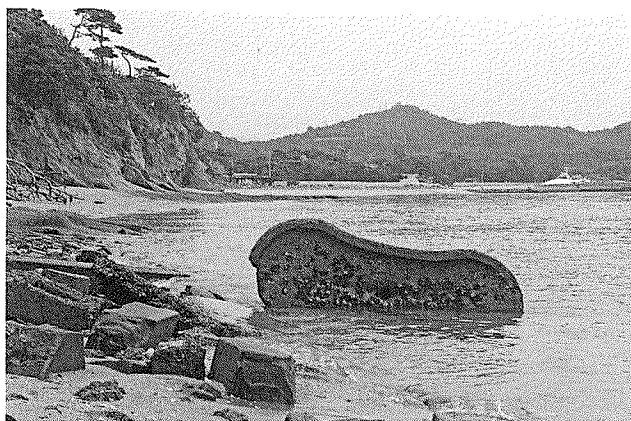
さきのテレビ番組視聴後、ウェブサイトYahoo! JAPANのトップページに、写真つきで大島の記事が出ていたことに驚いた（2010年7月19日閲覧）。それが、解剖台についてだった。扱いつらいどころか、ハンセン病療養所の島として大島が報じられたのだった。解剖台のことは、7月初め（確か8日前後）に大島青松園の脇林清に電話したときに聞いていた。脇林はいくぶん興奮したようすで、かつて大島の療養所には、石造りのしっかりとした解剖台と、コンクリートで簡易に造られたそれとの2台があり、いつしかどこにあるのかわからなくなっていた、それ

が埋もれたまま浜であらためてみつかри、芸術祭で展示したいと考えていると話した。場所はどうか、納骨堂がある高台のしたで、2010年には向日葵が植えられたそのあたりようだった（この点はあとで早合点とわかる。後述）。このときのわたしは、脇林の興奮にみあうほどの受けとめ方ではなかったとおもう。療養所での物故者の解剖は、光田健輔による執刀件数の多さで知られていたし<sup>4)</sup>、療養所での調査をくりかえすなかで、かつては療養所に入るときに解剖承諾書を書かされたということも読んだり聞いたりしていたから、そう珍しいことではないとの思いだったろうか。この時点で高松にゆかずともできる、ウェブサイトでのニュース情報をいくつか集めておいた。

2010年7月後半の大島での調査にさいして、実際に解剖台をみた。こびりついたいくつもの貝が、それが海水に浸かっていたことをあらわし、中央で2つに裂けたかたちは無惨にみえ、そしてなにより、そうした現物がそこにあること、がわたしを圧倒し、これを記録しなくてはならないとおもうにいたった。8月下旬に石居人也と、高松市中央図書館で地元紙と三大紙などの地元版を閲覧し（『四国』『山陽』『朝日』『毎日』『読売』『産経』各紙7月1日から31日まで）、大島青松園でふたりの方から解剖台をめぐるお話をうかがった。本稿は、大島青松園で使われた解剖台の引き揚げをめぐる記録で、その写真、その報道記事を史料として伝えるとともに、療養所とそこでの生の歴史を考える論点を示すこととする。

## 第1章 写真

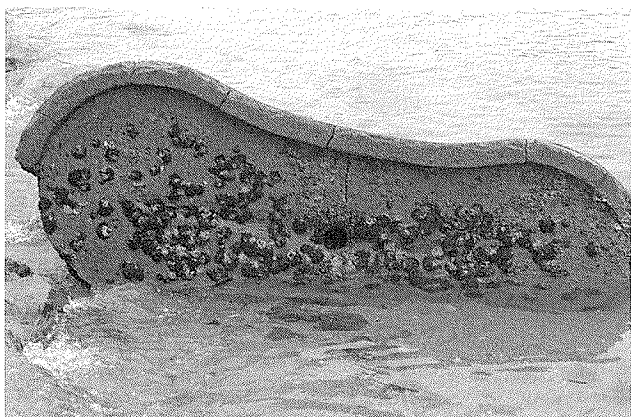
ここに掲載した8葉の写真の説明しよう。写真①～⑤は脇林が、写真⑥～⑧は阿部が撮影した。写真①～③は、2010年7月2日の撮影。この時点で被写体は多くの人びとにとってコンクリート塊にすぎなかった（写真①では後方に官有船の「まつかぜ」がみえる）。写真④は7月13日に撮影された。海岸からコンクリート塊が牽引され、それが芸術祭大島会場での展示場の1つ「GALLERY15」まえにすえられて（ただし、野ざらし）、ようやくこのコンクリート塊がかつての解剖台としてみられるようになった。のちにみるとおり、すでにこの時点で新聞報道は始まっていた。写真⑤には7月21日におこなわれた「供養」のようすが写っている。解剖台には4本の柱に支えられた屋根がつけられ、そのまえで、真宗の葬式がいとなまれるときにいつも来島する僧侶と、園長、自治会長たち「幹部連」によって「供養」がおこなわれ、このときとくに在園のものすべてに出



写真①



写真②



写真③



写真④

席が呼びかけられたわけではなかった、と脇林から聞いた（この段落の「 」内も脇林の表現）。こうしてかつての解剖台は、芸術祭の展示作品になった。

写真⑥⑦は8月15日に、写真⑧は同月20日に撮影した。海からの引き揚げにさいして、解剖台はそのほぼ中央で2つに割れてしまった。側面の黒いところは、こびりついた貝を剥がすためにバーナーの炎で焼いた跡だという（脇林談）。写真⑧で、解剖台中央部のくびれと傾斜がいくらかわかるだろうか。ここで、解剖台の実測数値を示そう。全長は201cm、その中央部に排水口（口径8cm）があり、そのあたりで側面がくびれ、かつ中央部にむかう傾斜がついている。いまはその大部分が欠落している縁の幅と高さは7.5cmと5cm。中央部のくびれたところの横幅が66cm、最も幅の広いところで横81cm、高さは下端から縁の上端まで、81cmあった。ひとが台で横たわる縁の内側は、長さ186cm、幅が51cm（狭）と66cm（広）となる。

ウェブサイトにおいても、また新聞紙面においても、この解剖台についての最も早い報道は7月10日付となって

いた。それよりもまえに、まだ海岸にそれがコンクリート塊としてあったときに写真撮影をした脇林に、浜からそれを牽引する経緯をうかがった。

脇林は、日々、島のあちこちの自然を撮影している。デジタルカメラを持つようになった10年くらいまえにすでに、大島の西海岸北方にあるコンクリート塊が、かつての解剖台だったことに気づいていたという。だが、被写体としてはそれを避けて、写真に撮れずにいたとのことだ。それを、芸術祭が開かれて大島のことを知らないひとがたくさん島に来るようになるこのいま、世に報せなくてはならないとおもい、まず、このコンクリート塊を撮影して、その写真を自治会に持ち込み、芸術祭のディレクターと自治会長が動くことによって園当局がコンクリート塊の引き揚げを決意した。脇林は、意外なほどに速やかにことが動いた展開に驚いた、という。だがこの迅速さは、重機を使ってコンクリート塊を「岩場でころがし」、「がっ」とつかんで、引き揚げることとなり、そのためにコンクリート塊が割れてしまった、と彼はみている。また、コンクリート塊